



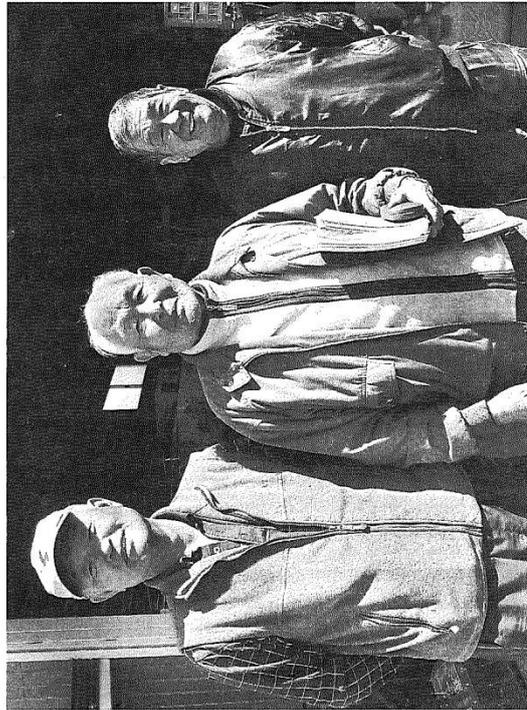
3月12日付、農業共済新聞東海版にて、岐阜県神戸町でEMを活用した農業を営む高橋義弘さんの取り組みが大きく取り上げられましたので、紹介いたします。

【岐阜支店】「野菜そのものよりも、まず土を肥えてほしい」と語る神戸町の高橋義弘さん(67)は、「EMボカシ」を利用した土作りの方を注いでいる。

### 神戸町 高橋 義弘さん

「EMボカシ」は光合成細菌が配合されたEM菌に米ぬか、もみ殻を混ぜ、嫌氣的(空気に触れない状態)に発酵させて作る。発酵させると有用な微生物がメタンガスと茶色な成分を食べ、動植物にとっては有益な有機栄養を生成。有機物が持つエネルギーを土すこなく植物に受け渡していくことができる。

「健康な作物は健康な土に育つ」と語る義弘さんは土作り仲間の高橋昌雄さん(82)と高橋道生さん(70)と共にEMボカシを使った堆肥作りの方を注ぐ。年間15tの堆肥を作り、田、畑の土に混ぜ込む。堆肥には土壌粒子を結び



土作りの仲間。左から義弘さん、昌雄さん、道生さん

つける働きがあり、こうした供給もすることができる。土は団粒構造の土となる。土はまだ畑の中では雑草により、アミノ酸が生まれ、それを吸収することで作物の糖度が高くなるという。じわじわと効いていくかな

いが、それがおいしいの秘密」と語る昌雄さん。道生さんは「ネギもニンジンも本当に甘い。米もかめばかめば旨味が出てくる」と笑顔で話す。

義弘さんは田舎で、畑に返る敵、ハエの嫌で米、ブロッコリー、ニンジンなど年間を遣いさまさま作物を手掛けている。EMボカシを使用する場合は「栽培する野菜によって調整が必要」と話す。

義弘さんは以前、化学肥料を使用していたが、食って安心な野菜を作りたいとEMボカシを使用した野菜作りを始めた。だが、化学肥料からの切り替えには時間がかかった。「特にホウレンソウは一番影響が出た」と語る義弘さん。EMボカシを使用し栽培を始めた当初は小さなものしかできなかったが、3年目からやっと大きくなり始めた。時間はかかったが、病気をはねのけ、連作障害も起きない地方ある土壌へと改良された。

こうした多くの効果を得られるEMボカシだが、作るのには大変な手間がかかる。「手を抜くとダメになってしまう。愛惜を持って土に向き合っています」と語る3人は、おいしい野菜を作るため、努力を続ける。(田野)

## 手間惜しまず愛情込めて



EMボカシの由来を確認する義弘さん

# 野菜 「EMボカシ」利用し堆肥自製

# 健康な土で健康な作物

◇◇◇◇◇ イベント、講演会のご案内 ◇◇◇◇◇

■ 善循環の輪 岡山の集い in 児島  
【日時】4月26日(土)開場 10:00  
【お問い合わせ】U-ネット事務局

【場所】児島市民交流センター ジーンズホール